

生徒指導の道を開く —生徒指導の実践から方向を探る—

田中芳雄

I はじめに

現在、社会情勢は大変厳しい方向へと激変し、その社会の変化に伴って学校は、生徒指導に関する複雑化した課題を抱えている。一度、学校が荒れて落ち着かなくなると、生徒指導は、消極的指導に陥りがちになる。生徒指導の本来のあり方は、2010年（平成22）3月に刊行された「生徒指導提要」に「一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動のことです。すなわち、生徒指導は、すべての児童生徒のそれぞれの人格のよりよき発達を目指すとともに、学校生活がすべての児童生徒にとって有意義で興味深く、充実したものになることを目指します」と明記されている。学校では学校全体を通して、生徒一人一人が心身ともに安定し、充実した学校生活を送り、自ら考え、判断し、主体的に行動できる能力を育成すること、究極的には「生きる力」をつけることが重要である。

本稿では、筆者が平成14年から4年間、校長として勤務した、いわゆる「荒れた中学校」を取り上げ、それをどのように立て直したかについて整理、分析を行う。そして、その成果と方法論を大学における教員養成課程の授業でどのように活かすべきかということについて検討する。

II 実践報告—A中学校での経験から

1. A中学校の現状

A中学校は、市の中心部から比較的近く、住宅街の中央部に位置しており、生徒数四百数名、教職員数36名ほどの中規模の学校であった。生徒たちは、自転車で行ける距離に繁華街があるため、休日ともなると買い物やゲームセンターへ出かけ、他校の生徒と接触する機会も多い。

筆者が赴任した平成14年4月、校内は落ち着いた生活には程遠く、教師は生徒の指導に追われる毎日で、生徒が下校するとホッとしたものだった。始業式の翌朝、校長室のドアを開けると、茶髪でとび職の服装をした2人の生徒がソファに座って喫煙していた。一人はA中学校の3年生で、もう一人は他校の生徒であることが分かった。新しい校長がどんな人間か見に来たとのこと、筆者は煙草をやめさせ、しばらくいろいろな話をしていたその時、新3年生所属の先生方数名が聞きつけやって来て、一触即発の状況となった。前校長から聞いていたので驚きはなかったが、これから先、落ち着いた学校をどのように取り戻せるか思案に暮れた。

筆者は、昭和50年代、「荒れた中学校」の3年生の学級担任をしたことがある。毎日事件が起きない日がない学校であった。その結果9人もの生徒を少年院、及び鑑別所に送ってしまった苦く残念な経験がある。その後も何回かの生徒非行の大波が押し寄せてきたが、その都度何とか乗り越えてきた。

A中学校の「荒れ」は、当時の日本全国の中学校が「荒れに荒れた時代」と大きな相違があった。当時のようにリーダーを頂点としたピラミッド型で徒党を組んで行動をしていないこと。シンナーを吸引しながら登校

し、問題行動を起こすようなことがないこと、問題行動の生徒が伝染病のように増えないこと等であった。しかし、「このままにしておくわけにはいかない。何か行動を起こさなくては…」と一念発起し心を奮い立たせた。そのためには全教師の協力が不可欠で、年度初めの職員会議で呼びかけた。教師たちも「もううんざりだ」と思っていたようで、まず教師への呼びかけ、「落ち着いた学校を取り戻そう」を「合言葉」に生徒指導に取り組んだ。

A 中学校の問題行動は、3年生が起こしているのがほとんどである。授業離脱、授業妨害、生徒間暴力行為、卒業生とのつながり、3、2、1年生とのつながり、万引き、窃盗、いじめ、不登校、対教師暴力などから、時代や社会の変化の中での家庭内の虐待も加わり複雑さと多様性を増した。いじめも携帯電話やインターネットを介し発覚も難しくなっている。最近の特徴的なものは、社会や大人への反発とは異なる発達障害や内面に根ざす問題行動、一見まじめで目立たない生徒が突然キレる事件が目立っている。例えば、普段おとなしい生徒が突然コンパスで友達の手を刺してしまったり、カッとなって相手の顔をなぐるなどのトラブルが年間8件あった。

生徒指導委員会の話し合いで、生徒を指導するにあたって、次のように分類した。

- ①週に数回突如として何も持たないで私服で登校し、授業には出ず、出たとしても授業を妨害、下級生を呼び出したり、誰に対してでもすぐ暴力をふるう生徒（1人）
- ②時には暴力もふるい、授業の始業チャイムが鳴っても、教師に促されるまで昇降口や廊下を徘徊したりし、なかなか教室に入らなかったり、たとえ入っても大声で私語をし、授業を妨害する生徒（10数名）
- ③授業妨害までいかないが、私語が多く落ち着かない生徒（かなり多い）
- ④まじめに学習に取り組んでいる生徒（多くの生徒）

さらに、校舎内外に落書き、飴やガムの包み紙や紙屑が散乱、掲示物がはがされたり、悪ふざけによる器物や窓ガラスの破損、花瓶の花が折られるなどが目立つ。一般生徒の規範意識も弱化しており、学校生活を送る上での校則をはじめとするルールがいつの間にか守られなくなっていた。

（1）家庭の状況

問題行動を持つ生徒は、経済的に恵まれていなかったり、諸事情により親と一緒に生活ができず祖父母に育てられていたり、片親であったりする家庭環境の生徒が一部にいるが、両親と一緒に生活していても親の養育態度の過保護、過干渉、放任、あるいは親子の絆やしつけ不足の家庭環境の生徒が多い。自分を誇示するために精一杯の虚勢を張り、注意を引き付けようと、いろいろな事件を引き起こした。事件を起こしても保護者は、体面を気にし表面では叱責するもののその場限りで、実際は、指導しても効かないといって放任したり、保護者が粗暴になり力でたたきのめし、親子の溝を一層深めたケースがあった。教師が親がわりになって親身に対応せざるをえない状況も時々見られた。

（2）卒業生、上級生、仲間とのつながり

環境や精神的に似たような境遇にある者が、仲間集団をつくり、大胆な行動を引き起こしていた。自分だけではないという意識が、罪悪感を希薄にし、善悪の行動を考える判断力を鈍らせていた。また、非行化した卒業生等に、力関係で拘束され、指示に従わざるをえない状況に置かれていた。下級生は、上級生の命令で動かされ、自分たちが上級生になると、やらされてきたことを同じように下級生にやらせていた。その悪循環が教師の指導力を上回って、荒れた状態を引き起こしていた。

（3）一般生徒の態度

生徒たちの中には、問題行動生徒を見て憧れる者、行動はしないが情的に同調する者もいるが、傍観する者がほとんどで、行動を戒める生徒はいない。いやだなという気持ちをもっていると言えない状況であり、やがて学校生活の基本的なルールを守る感覚が麻痺してくる。問題行動を持つ生徒は級友からの遊離を口に出さなくても、非常に気にかけていた。一般生徒の全体的な感覚の麻痺は、問題行動に対する罪悪感をさらに希薄にさせる要因となった。

（4）教師の対応

教師から多様な意見が出ていろいろな角度から分析できるが、個々の教師の指導にアンバランスを生みやすい。指導のアンバランスは、教師不信につながり、指導の効果を阻害し混乱した状況を作り出す要因である。ま

た、信頼関係の構造に配慮することなく威圧的に対応する教師は生徒の反発を招く。その反発は、反発しやすい教師へと向けられ根本的な対応とはなっていない。

2. 全教師によるカウンセリング・マインドを活かした教育活動

(1) 全教職員の共通理解、共通指導

今の時代、かつての厳しい管理指導だけでは人は動かない。厳しさの中にもやさしさが必要である。しかし、学校が規律を失っている場合は、カウンセリング・マインドの基本である「受容」と「共感」だけでは、もはや生徒指導は機能しない。アメリカではゼロトレランス方式（規則違反者には規則どおりに措置をする）を適用することもやむをえないとしていると聞くが、日本の中学校であるなら「出席停止」がこれに当たると言える。A 中学校では、教師の「毅然とした態度」、つまり力でない教師としての「権威」を持ちながら、生徒とのふれあいを大切にしたい人間関係をつくりながらカウンセリング・マインドを活かした生徒指導に取り組んだ。生徒に対しての心構えとして、次の三つの目標を掲げ育てることを取り決めた。

- ① 出会い関係をつくる。
- ② 言い分に耳を傾ける。
- ③ 存在感を与える。

(2) 全教職員の団結と行動

どこの学校にも学校要覧を開くと、素晴らしい「生徒指導体制の全体計画図」が載っている。A 中学校にも当然あるがあまり機能していない。そこで見直し、確立させ、それを基に機能させるために教師の日課を変更した。問題生徒がたむろしている場所は、主に昇降口や廊下である。主として3年生であるために、1, 2年生所属の教師は、その生徒たちを避けて自分のクラスや授業の教室へ行っていたのである。まず、どこからでも教師が生徒を心配しているよというサインを出すようにした。

その全教職員の行動は、

- ① 始業前に全教師で登校指導及び校舎内の巡視をする。
- ② 朝の打ち合わせは、週3日とし、学年の半数が出席、他の半数は二人組で巡視し、生徒と交流をする。
- ③ 1, 2年生所属の教師も授業に行く時は、3年生の廊下を通り、あいさつをしながら「授業が始まったよ。教室に入りなさい」などと声かけをしていく。その後は、次に授業が空いている教師が巡回する（ローテーションを組む）。
- ④ 引き続き授業のある教師は職員室に戻らず次の授業へ行く。次が授業の空きの教師は、授業が終わってもすぐに職員室に戻らず、次の授業の教師とバトンタッチをする。

帰りの学活が終わり、生徒が下校するまで毎日続けた。

3. 全校生徒への指導

生徒の遅刻や生徒を教室に入れる時間など問題行動ばかりに目を向けていた間に、毎日の学校生活がルーズになっていたのを反省し、各学級で学校生活の原点である基本的生活習慣を取り戻すこと、及び活動意欲を高めることを目標に、次のように一年生の段階から中学校生活をどのように過ごさせるかの方針を教師が共通理解をし具体的な行動目標を学校長が全校集会で呼びかけた。生徒会にも協力を依頼し、それを受けて生徒会の顧問は、生活委員、整備委員、美化委員を動かし、学級担任は自分の学級で、他の教師は授業の中で補足し生徒たちに具体的な行動目標を持たせ、行動を促し発達段階に応じて指導を積み重ねるとともに、全学年に行動目標の具体的な3点を柱として取り組むことになり学校長が全校集会で呼びかけた。

- ① 元気にあいさつをする（言葉づかい）。 ② 時間を守る。 ③ 美化に努める。

- 〔1年生〕 生徒の基本的な生活行動の定着を図るために、教師指導を中心とする。行動は5分前に起こし、あいさつの意味をよく理解させる。教室内外の美化に努める。ごみを落とさないことや清掃当番の際、自分の責任を果たすことに重点をおいて取り組ませる。
- 〔2年生〕 1年間培ってきた経験を基に、委員会や係のいろいろな仕事を与えられたものとしてではなく、自ら進んでやろうと努力する姿勢を重視して取り組ませる。特に、集団の一員としての自覚を促すことに力を入れる。
- 〔3年生〕 最上級生として自覚を持ち、3つの行動目標を他人に言われなくても実践できるようにすることを重点として取り組ませる。自ら率先して、あいさつをすることや時間を守る、美化に努めるなどの自分の役割分担をしっかりと行動で示す態度の育成は、人的環境、物的環境をよりよい方向に改善するための原動力となる。

4. 生徒個々への指導

(1) 教育相談

生徒に対する積極的な指導として、内面からも迫ろうと全教師がいつでもどこでも教育相談を行い、学級担任は、年間計画及び必要である時はいつでも今まで以上に強化して行うことにした。学校の教育活動の一環として行う教育相談については、「教育相談は、生徒指導の一環として位置づけられているものであり、しかもその中心的な役割を担うものである（生徒指導資料集第21集）」とあり、教育相談は生徒指導を支える重要な機能であることから、すべての教師は、友達の悩みや進路・問題を抱える生徒の援助を行うためには教育相談に関わる指導力を身に付ける必要がある。さらに、こうした援助を行う際には受容と共感を基本とするカウンセリング・マインドを活かして生徒に接することが大切であり、研修会を何度か持った。スクールカウンセラーを含めた専門家のカウンセラーでなくても実践できる「生徒指導を意識した教育相談」に取り組むことにした。特に、問題行動のある生徒については長時間を要するので、順番、時間帯に配慮して行うようにした。

- ①スクールカウンセラーとは密に連携は取るものの、それとは別に全教職員でいつでもどこでも行うのと同時に、年間指導計画を立て組織的に行う。A中学校では、主に学級担任（あらゆる内容）と校長（進路をからめて）が計画的に行い、他の教師には（生徒指導主任・養護教諭等）内容に応じて支援してもらう。また各教師から申し出があれば、学級担任と連携を密にして支援してもらう。その際、生徒指導の機能である、治療的機能、予防的な機能、開発的な機能の3つを個々の生徒に使い分ける。
- ②教育相談には、いろいろな理論があり、理論の考え方や技法がある。それらを総合的に捉え、難しく考えず、日常の教育活動において教師が生徒と向き合い、信頼関係を保ちながら、共有し、粘り強く、という姿勢で学級集団の人間関係を掌握する。
- ③ 教育相談の実際（計画的教育相談）

- 1. 全教職員・・・いつでもどこでも・・・多種多様な内容
- 2. 学級担任・・・年間計画 2回（5月、9月）・・・特に問題行動を持っている生徒の芽を摘む
2回（7月、12月、親子面接）ことを中心に
- 3. 校長・・・年間計画 2回（3年生 夏休み、12月）・進路の話題をからめて生徒指導
(2年生 6月末)

(2) 問題行動を持つ生徒への対応の実際

4月初より学校は落ち着かず、A君が登校してきた日には教師も緊張の色を隠せない。A君にまつわりついている生徒まで浮足立ち、ざわざわし落ち着かなくなり、A君を意識してか教室に素直に入らなくなる。教室に入ったとしても、おしゃべりをし、教師が注意しても聞き入れず、教科書も開かない。A君はめったに自分の教室には入らず、学校内を徘徊したり、下級生の教室へ行き、知っている生徒を呼び出し、教師に注意される

と殴りかかるのである。したがって、A 君をなんとかよりよい方向に導く方策を考えると同時に、その他の問題行動の生徒について、カウンセリング・マインドを活かし、自分の学年は、自分の学年所属教師を中心に指導・援助し、さらに生徒指導主任をはじめとした他学年所属の先生方が臨機応変に応援した。

生徒が問題行動を引き起こす背景は複雑である。目的意識を失い、衝動的に行動している場合が多い。時間がかかるが、じっくりと腰を据えて生徒一人一人を尊重して関わる中で、集団の一員としてクラスの中に溶け込ませる努力を続けた。

①問題行動の対応

「あの子さえいなければ、学級から問題がなくなる」ということで、関係諸機関をはじめ施設に送ったり、転校させたりしたことを過去に経験したことがある。激しい暴力事件や問題行動を起こした生徒に対しては関係諸機関と連携し指導することが有益であるが、中途半端な指導の場合はかえって逆効果となり、ますます荒れてしまう経験もした。A 中学校の A 君がまさにそうである。さらに関係諸機関と連携を密にし、「生徒を絶対見捨てない」という姿勢で取り組んだ。生徒に裏切られたり、だまされたりすることは多々あったが、根気よく継続した。

②サポートチームの立ち上げ

A 市教育委員会は、平成 14 年度文部科学省より「サポートチーム等支援システムづくり推進事業」の委託を受け、4 月よりその研究モデルケースとして A 中学校と学区小学校の 2 校が依頼され、9 月に「A 中学校区サポートチーム」を立ち上げた。

＜目的＞

中学校区における、いじめ、暴力行為、非行など問題行動の予防と前兆の発覚、及び実際に起きてしまった時、適切に対処し、当該児童生徒の指導・支援を効果的に行うシステムである。

＜組織＞

・「中学校区サポート委員会」を編成する。

構成委員・・・中学校長、小学校長、生徒指導担当、児童指導担当、少年補導員（2 名）、元 PTA 会長、中央児童相談所、地域代表者（民生委員・児童委員協議会 2 名）、教育委員会（2 名）

・「個別サポートチーム」を編成する。（9 月に立ち上げ）

小・中学校で特に問題を抱えている児童生徒に対して「個別サポートチーム」を編成する。中学校では、A 君をその対象としてサポートチームを立ち上げた。

＜A 君についての「個別サポートチーム」＞

A 君と接点を持てる人、数名でチームを組む。

A 君について（A 君については、本人・保護者の了解を得ている）

家族構成：本人（中 3） 弟（小 5） 妹（小 3） 祖父 祖母 5 人

実母は離婚、再婚を繰り返し、現在 S 氏と再婚し、一児をもうける。（他地区に在住）

現状では、本人が母親と一緒に生活することは難しい。祖父母に育てられているが、二人共高齢のため、十分目が行き届いていない。

授業離脱、徘徊、喫煙、器物破損、暴力等、教師には従わない、の繰り返しである。

【A 君の指導・援助の経過】

個別サポートチームを組む以前（4 月から 8 月まで）

①前年度（中 2）の授業離脱から始まり、問題行動が日増しにエスカレート。

今年 2 月に学級担任の S 教諭に暴行し、警察に補導される。

②4. 5 月は、数回ずつの登校、その度、S 教師を見かけると興奮し、殴りかかる。

③6 月から週 3. 4 日登校しだったが、1 日 1～2 時間程度で下校。自分の教室には入らず、入ったとしても授業を妨害し 10 分位で離脱。保健室へ行くことが多いので養護教諭に依頼し、プリント（国語や数学など）

に取り組ませるが長続きしない。他のクラスに入ったり、下級生を呼び出したり、喫煙しようとしたりするため、3年生所属の教師が常に複数でついている。一度注意をすると興奮し、大声を上げ、3年生所属の教師が駆けつけるとますます興奮し暴れる。S教師が顔を見せると興奮のターゲットをそちらに向け殴りかかる。彼が登校してきた日は、ほとんどこの繰り返しであった。

【個別サポートの立ち上げ】

9月に、4月からの準備期間を終え、正式に「A 中学校区サポートチームの立ち上げ」の話を受け、第1回の会合でA君の「個別サポートチーム」を立ち上げた。

A君の「個別サポートチーム」は、学級担任、生徒指導主任、元PTA会長、校長とで構成した。

《具体的な取り組み》

- ・学級担任・・・「A 中学校区サポート委員会」には所属しないが、今年度は学級担任でもあり、4月より指導・援助をしていることから、A君の「個別サポートチーム」の構成員に加わり、直接指導・援助をしてもらい、必要あれば「A 中学校区サポート委員会」に出席してもらう。毎日放課後、登校してきた日も登校しない日も、電話でなく家庭訪問をする。当分は「何しにきた。話なんかねーよ」と言われると思うが、学級担任は、「君はなくても、先生はあるよ。君がきちんと話を聞くようになったら話すよ。また、明日学校へ来いよ」と言って帰ってくることを当分続けることにした。
- ・生徒指導主任・・・学級担任を補佐する。A 中学校区サポートチームとの連絡・調整をする。
- ・元PTA会長・・・A君と家が近いので、朝や日中に見かけたりした場合自然体で声かけをする。人間関係ができた後、祖父母とも話し、援助をする。
- ・校長・・・A君との衝撃的な「出会い」をもとに、学校に登校した場合、養護教諭と相談し、授業の補講をすると同時に、よりよい方向へと導く。

以上の役割分担を実践し、会の度に情報交換をし、修正を加えながら続けた。

(3) 家庭、地域、関係諸機関との連携

今日の非行や問題行動を克服するためには、学校と保護者との責任のなすり合いをするのではなく、教師と保護者が共に悩み、解決の方向を探って行こうという姿勢でいく立場をとった。

①教師が家庭に出かける。

従来は、生徒の問題行動は保護者の責任といって、保護者を学校に呼んで指導するというパターンをとってきた。A 中学校では、全面的に保護者に責任をなすりつけたところで、いい結果は生まれないし生徒をよりよい方向に導けないという考えから、保護者と教師が信頼関係を構築することを第一とした。保護者が教師に心を開き、悩みを本音でぶつけられた時、解決の光が見えてくるだろう。教師が電話でなく、家庭訪問をして相談することにした。保護者を責めるのではなく、「共に悩み、共に何ができるか」を話し合うことからの出発である。

②同じ悩みを持つ「おやじの会」、「母親の会」

問題行動を抱えている父親の集まりである。ある父親の「他の親御さんの悩みや意見を聞きたい」という一言から毎週、夜、学校に集まった。最初は3名ぐらいであったが、口コミで10数名になり「おやじの会」を立ち上げた。それを聞きつけ「母親の会」も立ち上げ、同じ境遇同士での悩みや意見交換をした。9月後半になり、「わが子の様子を知ろう。」ということで、週1回、学校に来て「朝のあいさつ運動」及び「昇降口や廊下のごみ拾い」を行った。その後、「母親の会」、PTA 役員（約30名）も加わり、ローテーションを組んで毎朝続けた。最初は、親子の衝突があちこちで起こったが、これは、極めて有効な手段となった。さらに、一般の父母も加わり大きな力となった。

③PTA・地域・関係諸機関の協力

生徒たちの健全育成のために、PTAをはじめ、青少年指導員や各地域の所属団体が、生徒の登下校の時間を見計らって「声かけ運動」を展開、また、公民館での話し合いや生徒を集めての「地区別対抗スポーツ大会」を催すなど、地域の学校のために一役を担ってくれた。さらに、警察や市教育委員会も声かけ運動に参加してくれ

た。特に学区最大規模の「青少年育成連絡協議会（少年補導員，青少年指導員，高校の生徒指導主任（3校），小学校児童担当（1名）」など約40名が加わり，夜のパトロールを行った。PTAや保護者有志が運動会，文化祭などの行事にも参加して交流を深めるなど協力の輪が広がっていった。

Ⅲ 継続した取り組みの結果

Ⅲ－1 全教師と全校生徒についての関わり

筆者がA中学校に赴任して一番感じたことは，過去の管理的な体制では生徒を指導できない状況であったことだ。旧態依然たる教師の指導とは逆に，生徒たちは，社会の大きな流れに変えられてきたのである。「今までとは異なり，素直に教師の指導を聞き入れなくなり，やたらと反発してくる」という教師の声が聞かれるようになった。突然キレて弱い教師に対しての暴言，対教師暴力が見られるようになった。教師間では「民主化」が進み，問題等は全体の合意で決めていこうとするようになってきたため時間がかかった。しかし，そんな中でも，職員会議を重ねた結果，教職員が一致団結し毅然とした態度で立ち向かわない限り，問題は解決しないとの認識に立ち，具体的な取り組みが始まったのである。全教師に共通する行動に，生徒は，「先生方は，今までと違うぞ。何かが変わってきた」と気づき，教師もその反応に手ごたえを感じだし，徐々に「落ち着いた学校生活」を取り戻してきた。これは，教師も「こんな生活は，もううんざりだ」と思い，みんなで動くことにより，一般生徒をも動かし始めた。全教師は，毎日動くことによりまとまりだし，一枚岩となった。教師もこの取り組みの中で何かを掴んだようだ。半年たったころには，教師の再三の呼びかけや行動が実を結びかけてきた。花を折ったり，額縁を壊したりの行為やごみの散乱が減ってきた。一部の生徒を除いて授業もきちんと受けるようになり，行動や態度も変わりだし，協力をしてくれるようになった。

〔1年生〕学年や学校全体の動き方を習得する。学級で自分の意見をきちんと述べ伝えることが活動意欲のはじまりである。各自が自己表現することで話し合い活動が活発になり，友達との融和や人間関係の深まりが出てきた。教師の指導や助言を受け活動することによって，活動の仕方や協力することを学び，それらの大切さを自覚し徐々に学級での所属感を強めることができた。

〔2年生〕教師は，生徒の提案や企画をできる限り活かすように援助した。自分たちで企画したものを実践することによって活動意欲が高まり，協力体制がより深まり，活動する喜びが増し，活動した後の成就感とともに集団機能を分担する一員としての自覚，役割，責任感が芽生えてきた。

〔3年生〕1，2年生で得た実践経験は自信へとつながり，行事や委員会等でリーダー性を発揮しだした。最上級生として多方面でよりよいものをつくりだそうとする意欲が現れ，目的を意識して活動できるようになった。活動を重ねるにつれ，個人から学校全体へと見方を広げることができた。

生徒が自分たちで提案・企画したものを前面に出し，教師が裏方になるべく回る活動を増やすことは，これまで以上に教師の細かい配慮と準備や時間を要した。しかし，共に考える中で，生徒同士の結びつきと同時に，生徒と教師の信頼感も生まれるようになった。活動意欲が集団として大きく芽生えだした時，問題傾向を持つ生徒も，そこに同化され，次第に問題傾向が減少した。

Ⅲ－2 全校集会での呼びかけ

5月の全校集会で，筆者は，「今日から学校を変えたい。生徒の皆さんが，きれいな校舎で，笑顔を絶やさず落ち着いた学校生活が送れるような学校にしたい」と呼びかけ，さらに，そのためには3つのこと（①あいさつ，②時間，③美化）について実践しよう，また，「教室や廊下に飴やガムの包み紙，紙くず，時には煙草の吸殻までが落ちている。きれいな教室で生活しよう」と呼びかけた。

翌日の放課後，教師側で準備していた「花，絵，写真」を各教室，廊下，階段等に飾ったり，取り付けたりしているところへ3年生の女子10数名が手伝いに来てくれた。その後次々と手伝ってくれる生徒が増えていった。しかし，すぐに花が折られたり，花瓶が倒されたり，絵や写真の額縁が壊され，トイレやゴミ箱に捨てられたりした。教師たちは，「根気比べだ」と言って，再び花を飾り絵や写真を取り付けた。何度も何度も繰り返しているうちに，いつも整備委員や美化委員，有志の生徒が手伝ってくれるようになると同時に，家にあったと言って

花や絵、写真を持ってきてくれるようになった。そんなことが数か月続いた後、変化が現れ、花が折られ、絵や写真の額縁が壊されることがなくなってきた。

Ⅲ－３ 家庭・地域・関係諸機関への関わり

筆者は、PTA 関係、保護者会、地域諸団体の会（特に、青少年連絡協議会、民生委員児童委員）、警察、市教育委員会等々多くの団体の会に出席し、学校の現況を話したり、学校便り、PTA 便り等でも、「生徒の様子を発信し、協力を請うたところ、快く協力をしてくれ、登校指導、あいさつ運動、声かけ運動に一役かってくれた」、運動会や文化祭、スポーツ大会等に有志で参加、生徒と一緒に汗をかいったり、声かけをし、交流してくれた。それらの催しものには、「おやじの会」や「母親の会」も参加してくれ、徐々にではあるが、生徒には明るい笑顔が学校で見られるようになった。

Ⅲ－４ 教育相談について

学校の全教育活動にカウンセリング・マインドを活かし指導にあたった。教育相談にはそれを活かすために何回か研修会を持ち意見交換をした。まず、生徒の言い分を真剣に聞いて、共有し一緒に考えていき、1 回の教育相談で解決しないものは何度も行った。問題行動をする生徒は、5 月の教育相談、7 月の親子面接、夏休みの校長面接はすっぽかして来なかったし、その頃は「変なプライド」なのか、今さらという「一種のてれ」なのか、学級担任が説得しようとしても寄りつきもしなかった。しかし、学級担任が根気強く説得し続けたことと周りの生徒が進路についての話等を友達とするようになった 11 月頃、問題の生徒が「俺たちにも進路相談をしてくれねーのかよ」と筆者へ言い寄ってきた。筆者は、「待ってました」とばかりに、「学級担任は、その言葉を待っているよ。きちんと相談してきなさい」と送り出した。これも徐々にではあるが生徒が心を開き始めたのだと感じ、よりよい方向に向かってきていると実感できる出来事だった。

Ⅲ－５ 問題行動を持つ生徒

教師をはじめ、PTA、保護者、地域、関係諸機関等の協力が実を結び始め、多くの人たちが学校に来て、生徒に声をかけ接触をしてくれたおかげで徐々に授業離脱者が減少してきた。

A 君については、「個別サポートチーム」を立ち上げてから、学級担任はほぼ毎日家庭訪問を行った。筆者は、校長室を開放し、A 君をはじめ問題生徒一人一人を指導・援助した。民生委員・児童委員及び元 PTA 会長には外部からの接触を依頼し、指導援助をしてもらった。二ヶ月間位は、家庭訪問をする度に罵声を浴びせられていたが、学級担任の毎日の家庭訪問、及び他の人の指導・援助が功を奏したのか、学校で暴れても担任に向けて拳を向けなくなった。年が明けたころには、少しずつではあるが担任とは話ができるようになり、信頼関係も芽生えてきた。何とか就職先も決まって、卒業式には、とび職のような服装ではあったが出席した。卒業して一ヶ月後、初任給から購入した「ボールペンとシャープペンシル」のプレゼントをもって「迷惑をかけました」と学級担任に謝罪ができた。

Ⅲ－６ 何が学校を変えたのか

学校が順調に大きく変わったのは、新年度の人事異動で、学校長をはじめ教職員の構成メンバーが新しくなり雰囲気が一変したことだ。筆者は、学校を変えるのは今が絶好の機会と捉え、異動してきた教師とともに先頭に立って学校改革に取り組めた。今までいた教師たちも限界を感じていたところだったようで、指導体制を確立し何度も会議を重ねていくうちに、教職員の心が次第に一つになっていった。会議では、教師集団が行うこと、生徒に呼びかけること、家庭・地域・保護者に学校の現状を知ってもらい協力を得るために恥を忍んであらゆる機会に発信をすることを取りきめ、教師の役割分担を明確にして取り組んだ。やがて、教師たちの「落ち着いた学校を取り戻したい」という取り組みが「本気・本物」であることが伝わり、PTA や地域の少年指導員、少年補導員、青少年育成連絡会や各関係諸機関が積極的に動き出した。何よりも教師の取り組みを肌で感じてくれた保護者が「まず、自分の子供を何とかしたい」と心を動かし、「おやじの会」、「母親の会」を立ち上げ、教師と一緒に取り組んだことである。

生徒に対しては、教師が生徒の立場になって関わろうとする姿勢が見えることが一つの救いになると考え、生徒の気持ちに徹底して寄り添い理解することに努めた。時間はかかったが、それがよりよい「指導」になることがようやく分かってきたのである。生徒一人一人の存在感を重視し、生徒の自発性・自主性、自律性、主体性を

育てていくために学級活動、生徒会活動、行事等にも生徒の声を活かしていった。

教師たちも、率先して生徒と一緒に体を動かすことを始めた。校内の清掃活動、環境整備や地域の行事への参加、さらに、生徒たちに声をかけて放課後の補習学習も始まった。

人の心は、誠意を持って一生懸命に取り組むことによって動くと信じる。教師一人ではできないことでも、学年で、学校全体で一致団結してやればできることがある。保護者や地域の人の協力が加われば非常に大きな「教育力」になる。教師が誠意をもって真剣に取り組むことで、多くの人の心を動かすことができ、より多くの人の様々な力を結集して、地域全体で地域子ども達を育てていくことができると確信する。学校を核とした「地域の教育力」は教師にとって欠くことのできない力である。

Ⅶ おわりに

「落ち着いた学校を取り戻そう」と全職員で取り組み、何とか普通の落ち着いた学校生活が送れるようになるまで、何と苦しく長い道のりであったことか。また、何と多くの時間とエネルギーを費やしたことか。筆者は長い教員生活で多くの問題生徒と関わってきたが、必ずしもよりよい方向に指導・援助が十分できなかった。A中学校でも、いつ、どういう形で学校が荒れた状態になったのか分からないと聞いたが、それだけの要素があったのであろう。教師たちにそれが感じられなかったのであろうか。何か問題行動があった時、学校の指導態勢や個々の教師の指導にわずかな隙があると、そこから一気に崩れてしまうことがある。しかし、学校がきちんと運営されていれば問題があっても大きく崩れることは防げるのではないか。自戒を込めて反省する点を挙げると、全体的には、先回り指導（積極的指導）ができていなかったと言えるが、主要因は以下のようなことが考えられる。

①学級担任や学年の教師等の生徒への「関わり」に甘さがあった。

・生徒との接触が一番多い学級担任、及び教科指導に関わる教師が、小さな生徒の変化を見逃さない。

②学級担任任せで教師集団がばらばらの対応をしていた。

・全教師が協力し合い、情報交換を密にした生徒指導体制に取り組む。

③問題行動が起きた時だけの消極的指導であった。

・生徒のプラス面にスポットを当て、伸ばしていこうとする積極的指導に取り組む。

④学校と保護者との連携が密でなかった。

・学校内外の問題行動全てについて保護者に連絡を取ると、教師と生徒の信頼関係の溝を深める場合もある。

⑤「地域とともに歩む学校づくり」がうまく機能していなかった。

・地域の「教育力」を最大限に活用する積極的な取り組みを行う。

現在、筆者は、教員養成課程で「生徒指導論」の授業を持っているが、本稿で取り上げたような事例を課題とした授業で「討議の時間」を設定し、学校の荒れを事前に防ぐ方法及び荒れた学校を立て直すための方途について検討させている。学生たちができるだけリアルな学校現場の様子を知りイメージすることで、より討議を深めさせたいと事例を活用している。具体的には各6人のグループを編成し、グループでその課題について、各自が教師になったと仮定し、その課題に集団の場面での指導と個人指導の両面の視点を持って「問題点は何か。どう指導したらよいか」等討議する。その内容を各グループでまとめたものと各自の考えを提出させ、次の授業で筆者が各グループのまとめた内容を発表し、それについて学生たちの意見を聞きながら、その課題の問題解決の手がかりを探る授業を進めている。

生徒の問題行動は、生徒一人一人の性格や資質がそれぞれ異なるので、授業で学習したことが即そのまま生徒に対応できるとは限らない。今、学んでいる学生たちが近い将来教師になった際、古い言葉に「故きを温ねて、新しきを知る」という言葉があるように、先輩の先生方からいろいろな体験談を聞き模倣をしたり、さらに、それに自分が学んできたものを加えて新しいものを生み出し、生徒の指導・援助していくことが大切で、本研究がその一ヒントになればと考える。

「教師が変われば、生徒が変わる。教師が真剣に生徒に接すれば、必ずや生徒に通じる」と信じる。生徒指導

は、「生徒を理解することから始まり、生徒の目線で言い分を聞いてあげることだ」と言う人が多いが、そこに「指導」を加えなければ生徒指導とは言えない。さらに、中学校を卒業後2・3年経過するまで援助を続けることが生徒理解であり生徒指導と考えたい。そして、生徒指導で最も大切にしたいことは、「教師が個々の生徒にいかに関わっていけるか」であると考ええる。

本研究ノートは、筆者が赴任した4月から一年間の生徒指導の試みを記したものである。落ち着いた学校生活が崩れるのは速い。しかし、元に戻すには一人ではできない。教師はもちろん、家庭、地域、関係諸機関等、多くの人の協力なしには不可能である。何よりも何倍もの時間とエネルギーを要する。しかし、学生には、教師という職業は、「人が、人を指導・援助をする」ということで大変難しい仕事であるが、逆にやりがいと生徒たちとの関わりの楽しさもあることを伝えたい。そして、生徒から信頼される教師、生徒に夢を与えられる教師、生徒の心の痛みのわかる教師、学校が大変であればあるほど、理念と理想を追い求めていく教師になってほしいと期待を込めながら授業を行っている。

参考文献

- 小泉冷三編著（2010）生徒指導・キャリア教育 ミネルヴァ書房
- 嶋崎政雄著（2010）法規＋教育で考える生徒指導ケース 100 ぎょうせい
- 高橋哲夫代表（2009）生徒指導の研究 教育出版
- 中野目直明・池島徳大（1999）心の教育とカウンセリング・マインド 東洋館出版社
- 深谷昌志（1991）親がすべきこと教師がすべきこと PHP 研究所
- 中学校学習指導要領解説（2009）文部科学省
- 生徒指導資料集第20集（1988）文部省（現 文部科学省）
- 生徒指導資料集第21集（1990）文部省（現 文部科学省）
- 生徒指導提要（2010）文部科学省